

第一話 完成版

何も変わっていない家で

朝は、いつも通りだった。

炊飯器の蓋を開けた時に立ちのぼる湯気も、味噌汁の鍋を揺らす小さな泡も、いつもと同じだった。夫は食卓でスマートフォンを見ながら味噌汁を飲み、私が焼いた鮭に箸をつけて、「うまい」と短く言った。大きな声は出さない。急かしもしない。こういうところが、昔から変わらない。

結婚して十数年になる。

穏やかで、真面目で、仕事にも家庭にもきちんとしている。私
が少し疲れている日には、黙って流しに食器を運んでくれるし、
重い買い物袋も自然に持ってくれる。会話がないわけではない。
休みの日には近くの店へ買い物にも出るし、夕飯の味つけに気づ
いて「今日は少し薄めだな」と笑うようなこともある。

仲は悪くない。

むしろ、良い方だと思う。

だからこそ、言えなかった。

もう一年半ほど、夫とそういうことがない、なんて。

最初は本当に、忙しさや疲れが重なっただけだった。帰宅が遅い時期が続いて、私もパートや家のことでばたきしていた。今日はやめておこうか、が何度か重なり、そのまま少し間が空いた。少しが数か月になって、一年になって、気づけば今になっていた。

不仲ではない。喧嘩もほとんどしない。会話もある。食事も一緒にする。休みの日には、テレビを見ながら同じタイミングでお

茶を飲む。

ただ、男と女としての時間だけが、止まったまま戻ってこない。
私はそれを、責めたことがなかった。

責めるほどのことではないような気がしていたし、何より、今さら自分から求めるのがひどく恥ずかしかった。欲しいのは行為そのものだけではない。求められている実感の方だった。それを口にしてしまえば、自分が空っぽな人間みたいで、余計に惨めになる気がした。

食卓の向こうで、夫がコーヒーを飲みながら言った。

「今日もたぶん遅くなるかも。瀬尾、明日までにまとめなきゃいけない資料があるらしくてさ」

「そうなの」

「ああ。しばらく忙しそうだな」

瀬尾さん。夫の後輩で、今は敷地内の離れに泊まっている人の名前だ。

二週間だけ。仕事の都合で、会社が押さえていた宿が急に使えなくなつたとかで、夫が「うちの離れなら空いてる」と言い出した。三年ほど前まで義両親が住んでいた離れは、今はほとんど物置のようになってゐる。最低限片づけければ、人が泊まれないこともない。

最初は少し気が重かつた。けれど完全な同居ではない。食事も基本は別で、夕飯だけ一緒にするといふ話だったし、夫がそこまですうなら、と私はうなずいた。

瀬尾さんの方から、「朝食までは申し訳ないので、自分で用意し

ます」と言い出したのは、その次の日だった。離れには小さな冷蔵庫と電気ポットがあるし、前の晩にスーパーかコンビニでパンとヨーグルトでも買っておけば十分です、と。

その代わりというわけでもないけれど、私は温かいコーヒーだけは毎朝離れに持っていくようになっていた。

たいしたことではない。マグカップひとつ分だ。

けれど、その“たいしたことではない”が、いつの間にか小さな習慣になっていた。

食後、私はコーヒを注いだマグをトレーに載せて、勝手口から外へ出た。晩秋から初冬へ移る朝の空気は、まだしつかり冷たい。吐く息が白くなるほどではないけれど、頬に触れる風は乾いている。庭石を踏んで離れへ向かうと、戸は半分だけ開いていて、ノックをする前に瀬尾さんが出てきた。

「おはようございます」

「おはようございます。すみません、毎朝」

「いえ。冷えるので」

そう言いながらマグを差し出すと、瀬尾さんは両手で受け取った。

「ちようどいいです。いつもありがとうございます」

その言い方が自然で、丁寧で、何も問題がないからこそ、私は安心していたのかもしれない。

誰にも見られないと思っていた。

この家の中で、自分だけの時間だけは。

*

夫と瀬尾さんを送り出したあと、家は急に静かになった。

食器を流しに運び、残ったご飯を小分けにして冷凍庫へ入れる。洗濯機を回し、掃除機をかけ、風呂場の水滴を軽く拭く。やることはある。けれど、どれも午前のうちにはひと通り終わってしまう。

昼前には、もう手を動かす理由がなくなっていた。
適当にひとり分の昼を済ませても、まだ午後は長い。

窓から入る晩秋の光は明るいのどこか薄く、庭の木もすっかり葉を落として、枝の影だけが地面に伸びていた。誰もいない。離れの方へ人が入ることなど、まずない。

時間だけが余っている。

だから、私は長いこと油断していた。

ひとりの時間に、自分を慰めることがあるのは、もう珍しいことではなかった。

最初はひどく後ろめたかった。けれど、誰にも言えない空白を

やり過ぎすには、それしかない日もあった。満たしたいというより、静かにしたかった。身体ばかりが取り残されているような感覚を、少しだけ鈍くしておきたかった。

その日もそうだった。

私は居間のソファに浅く身を預けた。窓際に近く、昼の光がいちばんやわらかく落ちる場所だった。カーテンは閉めているつもりだった。離れの方から見えるはずがないと、頭のどこかで決め込んでいた。

だから、深く考えもしなかった。

ただ、ひとりの午後をやり過ごすみたいに、ソファに浅く身を預けたまま、自分の内側のざわつきを鎮めようとした。

息は少しずつ熱を帯び、指先だけが妙に正直に動いた。

こんな時、はっきり誰かの顔を思い浮かべるわけではない。けれど、寄りかかる先にあるのは、いつも夫の気配だった。

もうずっと途絶えてしまったぬくもりの名残を借りるみたいに、

私はひとりの時間をやり過ごしていた。

誰にも知られないはずの時間の中で、私は少しずつ何も考えられなくなっていた。

終わったあと、しばらく動けなかった。

満たされたというより、力が抜けただけだった。

何も考えたくなくて、ただ呼吸が落ち着いていくのを待っていた。肩から腕へ、腕から指先へと余韻がほどけていく感覚をぼんやり

追っていた。

その時だった。

視界の端に、窓の隙間が見えた。

カーテンが、少しだけ開いている。

閉めたつもりだった。

そう思い込んでいた。

思わず身体が強張る。

次の瞬間、離れの戸が開いて、瀬尾さんが外へ出てくるのが見えた。

息が止まった。

——今、出てきた。

ということとは、ついさっきまで中にいたということだ。

頭の中で、その当たり前の事実だけがやけに重く響く。

私は、いつからあそこにいたのだろう、と考えた。

瀬尾さんは、いつ離れに戻ってきていたのだろう。

離れの戸を開けて中へ入った時、母屋の窓の方へ目を向けただろうか。

その時、カーテンの隙間の向こうにいた私の姿は、見えただろうか。

見えたとしたら、どこまで。

怖いのは、今こちらを振り返ったかどうかではなかった。

いちばん知られたくない瞬間に、私は無防備なまま窓際のソファにいた。乱れた呼吸も、自分に触れていた手の動きも、そのままでの姿で。

その時に、瀬尾さんが離れの戸を開け、何気なくこちらへ目を向けただけで、見えてしまったかもしれない。

「……え」

声がかすれる。

瀬尾さんはそのまま敷地の外へ向かって歩いていく。もうこちらを見たのかどうかさえ、わからない。けれど、そんなことはどうでもよかった。

私はソファから立ち上がりかけて、膝に力が入らないことに気づく。慌てて服を整えながら、自分の心臓の音だけがやけに大きい。

いや、見えていないかもしれない。

たまたま戻ってきて、母屋の窓なんて見ずに、そのまま離れへ

入っただけかもしれない。

資料を取ることにしか頭になくて、カーテンの隙間なんて気づかなかったかもしれない。

そう思おうとしても、手が震えた。

私は靴をつっかけて、外へ出た。

誰に見られるわけでもないのに、胸元を押さえたまま庭を横切る。石の上に足を置いたたびに、さっきまで自分がいた場所から少しずつ距離ができていく。その距離が、逆に現実を強めていく気

がした。

離れの前まで来て、息を整え、そつと振り返った。

母屋の窓が見える。

自分がさっきまでいた居間。

あのソファ。

カーテンの隙間。

そこから、はつきり見えた。

離れの玄関は地面より一段高くなっていた。古い造りだから、戸口の前に低い階段がひとつあり、その上から母屋の窓をやや見下ろす形になる。だから、窓際の居間は思っていたよりよく見える。

ソファの背もたれの形も、クッションの置き方も、はつきりわかった。

そこから見えるのは、家具だけではなかった。

カーテンの隙間に近い位置に人がいれば、輪郭だけでは済まない。

手元の動きまで、隠しきれないはずだった。さっきまで私が夢中になっていた位置は、思っていたよりずっと無防備に窓の近くに
あつた。

見えないでいてほしかった。

けれど、見える位置だったと知ってしまった瞬間、さっきまでの「たぶん」は、別の重さを持ち始めた。

私はしばらくその場を動けなかった。

離れの戸は、もう閉まっている。

その向こうにいたはずの人が、ついさっきこの景色を見ていたかもしれない。

そう思うだけで、膝の裏が冷たくなる。

風が吹いて、木の枝がかすかに鳴った。私はそこでようやく我に返り、足早に母屋へ戻った。

＊

夕方になっても、手の先が落ち着かなかった。

夕飯の支度はいつも通りに進めているつもりなのに、包丁を持つ指先がやけにぎこちない。味見をしたはずなのに、同じ鍋に二度も塩を足しそうになる。カウンターに置いた皿の向きまで気になって、くだらないことで立ち止まってしまう。

夫には気づかれなくなかった。

瀬尾さんにも、もちろん。

そのくせ、離れの戸が開く音にばかり耳が向いてしまう。

夕食の席には、夫もいた。

だから私は、少しだけ救われた。二人きりではない。あの昼のことを思い出させるものなど、何もないふりをしていられる。

けれど、夫が話す仕事の愚痴にうなずきながらも、私は向かい側に座る瀬尾さんの箸の動きや、水を飲む時の喉の動きばかり気にしてしまっていた。

あの人は、何も言わない。

礼儀正しく、いつも通りに食べている。

それが余計に苦しかった。

味噌汁をよそい直しながら、私はできるだけ自然な声を作った。

「今日のお昼、いったん戻って来られました？」

夫が「ああ、そういうば言ってたな」とでも言ってくれることを、ほんの少しだけ期待していた。けれど、夫はご飯を口に運ぶ手を止めず、会話の意味も気にしていない。

瀬尾さんだけが、一拍おいて顔を上げた。

「……はい。少しだけ」

それだけだった。

けれど、その一拍が、私には長すぎた。

何でもない返事のはずなのに、そこに意味を探してしまう自分が、もう昨日までのままではなかった。

目を合わせるまでの間。箸を置く位置のわずかなずれ。何でも

ない調子を保とうとしているように聞こえる声。

私だけが、それを拾ってしまう。

「そうですか。何か、忘れ物でも」

「資料を、ひとつ」

「そうでしたか」

それ以上は続けられなかった。

夫は何も気づいていない。食後の予定を話しながら笑っている。その笑い声が、やけに遠く聞こえた。

食器を下げる時、ふと顔を上げると、瀬尾さんの視線がこちらにあるような気がした。ほんの一瞬だった。実際に見られていたのか、私がそう感じたただけなのか、わからない。

でも、もう同じではいられなかった。

見られたのかもしれない。

まだ、それだけだった。

なのにもう、瀬尾さんの視線を知らなかった頃の夕食には戻れない気がした。

第二話

離れの灯りが消えない夜

夕食のあとも、手の震えはしばらく収まらなかった。

流しに食器を運び、湯呑みを重ね、洗い桶に水をためる。やっ

ていることはいつもと同じだ。なのに、どれも少しずつ位置がずれる。茶碗を置く音が必要以上に大きく聞こえたり、箸立てに戻した箸の先が揃っていないことが気になったり、そんな細かいことばかりが目につく。

夫は居間でテレビをつけていた。ニュース番組の抑えた声と、時々入るスタジオの笑いが、やけに遠く聞こえる。瀬尾さんは「ごちそうさまでした」と言つて離れへ戻つていった。いつもと同じ、控えめな声だった。

何も変わっていないみたいに、家の中だけが進んでいく。

でも、私の中では何も普通に戻っていなかった。

今日のお昼、いったん戻って来られました？

見ましたか。

まだ口に出してもいないはずのその言葉が、もう胸の中に居座っている。今夜の私は、まだ聞いていない。まだ確かめてもいない。なのに、もう聞いてしまったあのような苦しきだけが先にある。

私は皿を洗いながら、さっきの食卓での瀬尾さんの一拍を何度も思い返していた。

…はい。少しだけ。

あれは、ただ資料を取りに戻った事実に対する返事だったのだろうか。

それとも、もっと別のものを含んでいたのだろうか。

自分でそう考えていること自体が嫌だった。

ただの気のせいかもしれない。

瀬尾さんは本当に、何も見ていないのかもしれない。

そう思おうとしても、そう思った次の瞬間には、昼間に自分で見に行った景色がはつきり蘇る。

離れの玄関は地面より一段高い。

戸口の前の低い階段を上がった位置からは、母屋の居間がやや見下ろせる。

あの時、私は自分の目で確かめてしまった。ソファ全体がはつきり見えた。クッションの置き方も、背もたれの角度も、そこに人が座っていればどこに身体があるかまで、思っていたよりずっと隠れていなかった。

ということは。

その先を考えるたび、指先が冷える。

ということは、あの時の手元の動きも、乱れた呼吸も、隠したかったところまで、あの角度からは見えていたに違いない。

違いない、という言い方をしてしまった自分に、私は少し遅れてぞつとする。

まだ本当に見られたと決まったわけではない。

それなのに、昼に自分で見てしまった景色のせいで、想像だけが勝手に細かくなっていく。

食器を洗い終えたあと、私は布巾で皿を拭きながら、居間の方をうかがった。夫はテレビに視線を向けたまま、時々思い出したようにお茶を飲んでいる。何も知らない。もちろん、知るはずもない。

そのことに、本当は救われるべきなのだと思う。
けれど今夜は、少しだけ遠く感じた。

夫はすぐそばにいるのに、私の恥ずかしさだけがひとりで取り残されているような気がした。

＊

片づけを終えて居間へ戻ると、窓の向こうに離れの気配があった。

カーテンは閉めてある。あのことのあとで、私は前よりずっと丁寧に布を寄せるようになっていた。それでも、布越しのわずかな明るさや、窓の向こうに建っている輪郭だけで、あそこに人がいることはわかる。

昨日まで何でもなかった離れが、今夜はもう別のものに見えた。

あの人がいる。

その事実だけで、家の空気が少し変わってしまう。

私はソファの近くまで行って、それ以上は近づけなかった。そこは昼間の私がいた場所で、ひとりで乱れていた場所で、見られたかもしれない場所だ。なのに視界の端から消えてくれない。

夫がニュースに相槌を打つように「ああ」と小さく声を出す。私は「お茶、淹れようか」と言いかけて、やめた。今それを言え

ば、私はたぶんいつもより少し高い声を出してしまう。

何もない顔をしたかった。

でも、何もない顔を続けるほど、何かがあることばかり自分に突きつけられる。

しばらくして夫が風呂へ向かい、ようやく私はひとりになった。ひとりになったところで落ち着くわけではない。むしろ逆だった。テレビの音が消えると、冷蔵庫の低い音や時計の針の音ばかりが大きき聞こえる。その中で、窓の向こうの離れだけが妙に意識に残る。

見たのかもしれない。

いや、見ていないのかもしれない。

けれど、もし離れの戸を開けたその瞬間に、ほんの少しでも母屋の窓へ目を向けていたら。

昼に自分で見た景色が、また頭の中に開く。

ソファ全体が見えていた。

隠れていなかった。

なら、見えたのは輪郭だけじゃない。姿勢も、呼吸も、自分に触れていた手の動きも、あの角度からなら隠しきれなかったはずだ。

私はソファの背もたれに視線を置いたまま、動けなくなった。

見たのかもしれない、ではもう済まなかった。

どこまで見えたのか。

どんなふうに見えたのか。

想像は勝手に細くなり、その細かさのぶんだけ逃げ場がなくなっていく。

私はたまらずカーテンの端へ手を伸ばしかけて、途中で止めた。少し開けて離れを見たところで、何が変わるわけでもない。むしろ、向こうに灯りが見えたら、それだけでまた落ち着かなくなる。

そう思うのに、見たい気持ちが消えない。

見たくないのに見たい。

知りたくないのに確かめたい。

あの離れの向こうにいる人が、何を知っているのか。
何も知らない顔のまま明日を迎えられるのか。

答えはどこにもないまま、時間だけが進んでいった。

*

寝室へ入っても、眠気はなかなか来なかった。

夫は疲れていたのか、布団に入ってしばらくするとすぐに寝息を立て始めた。私はその横で目を閉じたまま、眠るふりのような時間を続ける。

瞼の裏に浮かぶのは、昼間の自分ではなく、離れの戸だった。
戸が開く。

瀬尾さんが中へ入る。

その時、窓の方を見る。

カーテンの隙間の向こうに、ソファに座った私がいる。

乱れた呼吸。

動いていた手。

止まりきらない身体。

考えたくないのに、頭の中だけが勝手に再現してしまう。
私は布団の中で小さく身じろぎした。

隣に夫がいる。

そのこと自体は安心のはずなのに、今夜は逆に苦しかった。夫は何も知らない。私は何も言っていない。夫婦として同じ布団に入っているのに、私の羞恥だけがここには置き場を持たない。

この人に言いたいわけではない。

知られたいわけでもない。

でも、何も知られないまま隣に眠られていると、自分だけがどこにも戻れなくなったような気がする。

私は何度も寝返りを打った。

そのたびに夫が目覚まさないかと気にして、また動けなくなる。

静かにしているのに、胸の中だけがずっと騒がしい。

見たのか。

見ていないのか。

もし見ていたなら、どうして何も言わないのか。

もし見ていないのなら、どうして私はこんなに苦しいのか。

答えの出ない問いばかりが、布団の中で膨らんでいく。

私は一度だけ目を開けた。部屋は暗い。隣で眠る夫の輪郭もぼんやりとしている。その向こうに窓があり、その向こうに庭があり、さらに向こうに離れがある。見えないのに、そこにあることだけははっきりわかる。

離れの灯りが、消えているのか、まだついているのか。確かめたくなつて、私はすぐにその考えを振り払った。見てもどうにもならない。

それでも、見たい気持ちはしつこく残った。

隣には夫がいるのに、私の恥ずかしさだけがひとりで取り残されていくようだった。

もう数日だ、と自分に言い聞かせた。

あと数日だけやり過ごせば、瀬尾さんはこの家を出ていく。何もなかったことにしてしまえばいい。

そう思った。

けれど、その考えはすぐに別の不安に押し返された。

夫は瀬尾さんを可愛がっている。また仕事の都合で連れて来るかもしれない。

次に顔を合わせた時まで、このまま曖昧なままだったら。

そう思うと、ただ時間が過ぎるのを待つこともできなかつた。

＊

夜がどれくらい過ぎたのか、よくわからない。

眠れたのかどうかさえ曖昧なまま、気づけば窓の外が少しずつ明るくなっていた。朝が来る。私はそれに、安心より先に重さを覚えた。

朝になれば、またコーヒ―を淹れなければならない。

また離れへ行かなければならない。

また瀬尾さんの顔を見なければならぬ。

昨日まではただの習慣だったことが、今朝はもう恐怖に近かった。

台所に立つてコーヒー豆の袋を開ける。いつもの香りが立つ。お湯を注ぎ、マグを温め、トレーを出す。手順は身体が覚えていて、だからこそ逃げられない。やめようと思えばやめられるのに、やめた瞬間に自分が昨日を引きずっていると認めることになる。それが嫌で、私はいつもの朝の形を崩せない。

いちばん怖かったのは、もう一度あの人の顔を見ることだった。それでもコーヒ―を淹れてしまう自分に、逃げ道がないことだけはよくわかった。

もう、何も知らない顔のまま戸を叩ける気はしなかった。

トレーにマグを載せる。

持ち上げる。

その時、手がほんの少し震えた。

私は勝手口の前で一度立ち止まった。

行きたくない。

でも行かないわけにもいかない。

この曖昧さを、このままずっと続けることなんて、もうできない気がしていた。

庭に出る。朝の空気は冷たい。昨日よりもずっと乾いて感じる。離れまでの短い道のりが、今朝はやけに長かった。

離れの前まで来ても、すぐには戸を叩けなかった。

この向こうにいる人が何を知っているのか、もう曖昧なままでは耐えられないところまで来ていた。